「インター・アート・スタディーズ学会参加報告」『ars (東北芸術工科大学文藝)』第4号　1996年11月1日　194-207頁

インター・アート・スタディーズ学会参加報告

稲賀繁美

五月中旬の夕刻、コペンハーゲン空港に降り立つと、冷快な大気が肌をよぎる。宏い空を見あげると、太陽の光に横ざまから照らしだされた高層雲が、影を延ばして、淡い銀色に輝いている。その切れ間にはひたすら淡青の、ちょっと日本ではお目にかからぬ空が覗いている。何事につけ親切なドライバーの運転するバスで港に送り届けられてみると、水路に沿って並んだ船員町の風情ある建物が、折からの雹まじりの雪のなかにうっすらと浮かびあがっては消えてゆく。待ち合い室の窓から見やると、屋外はまるで真冬のような荒れ模様。まわりは両手にいっぱいビールのカートンや火酒の瓶を手にした地元の人達や、週末を故郷で過ごすらしい学生たち。ほどなく乗船時刻を告げられ、双胴のジェット・ボートに導かれる。対岸のスウェーデン、パルメまでは、ほんの小一時間ほど。出港するや、客室乗務員が飲食の注文を取りに回る。船内免税のためか酒類を注文する客も多い。墨を流したような空のしたで、ときにエメラルドのような不思議な色合いをみせて水面が走る。やがてボートが速力を落とし、港に近づくころには天候も回復し、不意に夕日が真横に差し込む。照らしだされたパルメの町並みは、深い陰影を美しく刻む。原色がいかにも北欧ならではの控えめな直裁さを演出する。船着き場から車道を隔ててすぐの赤い煉瓦造りの鉄道駅でペッグパックの切符を買う。木骨の屋根に覆われた長い回廊のさきに開けた雨ざらしのプラットフォームには、先程のにわか雨に洗われたのか、銀色の車体に赤と青の色彩がすなおに映える、清潔一点張りの列車が憩っている。真新しい革貼りのゆったりとした座席は、週末の日曜日のせいか、いたって空いている。ほどなくして車内放送もないまま滑るように発車。緑に包まれた一戸建ての住宅が点在する平坦な風景のなかを十分も走ると、もうルンドの駅だ。森に包まれた、どこにでもありそうな田舎の駅といった佇まい。地下道をくぐり抜けると、目指すホテルは駅前すぐの、石造りの市街地の発端に位置していた。明るい暮れどきの町並みも、週末のせいかいたって閑散として、ややもの寂しい風情を見せている。

予約を入れておいたルンディア・ホテルのフロントでの対応も、能率的かつ清潔で、飾らずちょっと地味で控え め。視線を落とすはにかみがちなお嬢さんたちの対応も、いかにもスウェーデンの人らしい。そんな月並みな第一印象を抱いたまま、ホテルの部屋で旅装を解き、出発直前の速達葉書で同宿と知った旧友、囮府寺司さんに電話してみる。運よく在室。三〇分ほどしてロビーで落ち合い、街に出る。日没後も一向に暮れようとしない薄明に包まれて、人口七万の北欧の小都市が憩っている。つい十時間ほどまえまで関西国際空港で梅雨の湿気にじっとりと晒されていたのに、今度は涼しく乾いた大気が顔の肌を引きつらせる。ざっと徒歩で一周するのに小一時間も要しない。十二世紀初頭の建立というロマネスク様式の白亜の大カテドラルの横手まで来ると、市庁舎広場に面して対角線に、古風な石造りの歴史建築に間借りしたレストランが見えた。扉を開くと木組みの廊下に招じいれられ、石の階段を曲がって降りた先にある半地下の食堂は、天窓の下で暗闇のなかに沈み、仄かに蝋燭に照らしだされていた。努めて見慣れぬものを注文してみると、いささか量に圧倒させられるほどの海産物は少々塩味が濃かったけれど、辛口の白ワインとともにゆっくりと楽しむうちに、いつしか陶然とする。ようやく北欧にやって来たのだな、というたおやかな安堵に包まれて店を出ると、薄暮はようやく深い群青の闇に転じていて、街路は橙色のナトリウム・ランプの灯に照らされている。車の騒音もなく、カフェの中から時折漏れる人々の喧噪だけが、かえってあたりの静けさを引き立てる。足音を響かせる石畳は歳月に丸く擦り減っている。靴底の感触を楽しみながら、宿場へと戻る。

どういう経緯で我々のところにこの学会への案内が舞い込んだのか、結局判然とはしなかったが、日本からの参加者は結局我々ふたりだけだった。偶然の一致とはいえ、大江健三郎がノーベル文学賞を受賞するや、事務局のハンス・ルンド教授からはさっそくファックスでお祝い状とともに、あらためて来訪を歓迎する旨の手紙を受け取っていた。むろん北欧四国からの参加者が大多数だが、文学以外の領域との協同を目指す比較文学者たち、旧来の美術史学の枠にとらわれずインターディシプリナリーな活動を目指す、言語と映像(Word and Image)学会のメンバー、映画やヴィデオ・アートを含めひろくメディアに関するコミュニケイション学を模索する研究者、旧来のディシプリンの乗り越えを図っている演劇研究者、さらに言語と音楽との関係を研究するグループを設立しようという機運の満ちて来た音楽学者といった面々が中心となって企画された学会であったことは、趣意書からも伺われた。もうこうした学会の組織にはすっかり習熟しておられるらしいルンド大学関係者や周辺の宿泊施設の、地味だが落ち度のない気遣い。ルンドという古都、そして一六六六年創立という、スウェーデン有数の伝統ある大学都市ならではの、大人びた成熟ぶり。いまさら外国からのお客のためにわざわざ飾り立てる必要もない落ち着きも心憎い。

＊

翌五月十五日

大学広場の花壇に囲まれた噴水の脇、古典主義に則った白壁も眩い大学本部の建物には、ちょうど満開のコブシの花がよく似合う。その斜めむかいに位置した講堂、パラエストラで、朝から開会式。Boel Flodgren 学長はすらりとした金髪の女性であるが、落ち着いた威厳

ある英語で大学の三五〇年近い沿革と三万五千名の構成員を抱える現状を紹介する手慣れた上品な挨拶。デンマーク統治下の神学校時代も含めればウプサラを抜いてスウェーデン最古の大学である。百三十名にのぼる発表者とさらに二百名を越える参加者のある、今回のかなりの規模の学会の行事一切を取り仕切りるのは Ulla-Britta Lagerroth 教授。こちらは今では恰幅のよい堂々たるおばさまだが、昔はさぞや、などと不謹慎な空想をしていたところ、ひょんなことから彼女の三十七年前の写真を拝見することになって、年齢を逆算してみるにつけ、枯れることとは無縁の若々しい魅力に唖然とする。一見してユネスコ勤めの国際公務員もかくやというほど社交なれした人だとの感触をもったが、実際大江健三郎氏をルンドに招いたときのお相手もなさったとかで、子息が見えなくなるととたんにソワソワする文豪の生身の魅力が、いかに福祉の国スウェーデンでの人気に馴染んだか、などとその時の裏話までもちだして、日本人参加者にもいろいろと興味を示し面倒をみてくださる。気取らず気の利く、開放的で包容力ある女性だった。

組織について一瞥しておこう。会議は午前に大物による key note address を組み、つづいて a、b、c、d 四つの分科会に分かれて、午前ひとつ、午後ふたつの計十二セッションが持たれ、そのあと夜の宴会が何度か組織される、といういわば定型。以下セッション番号と分科会記号を付記するが、出席できたセッションを順番に綴ってゆけば、おのずと 1、2-d、3-b、4-a などと並ぶ仕組みで、算用数字が時間帯、アルファベットが会場という縦横軸の整然たる配列からも、いかに合理的でわかりやすい組織だったかが伺えるだろう。もっとも全体会と四つの会場は大学内のあちらこちらに点在し、講堂とカフェは別棟、美術館の二階奥のつぎは、別の建物の地下の A.V と、慣れるまではやや戸惑う。とはいえ緑も美しい森のなかの小径をせいぜい二、三分の道程だし、道を尋ねれば会話の切っ掛けにもなる。運動不足でコックリ居眠りしないためにも、かえって森林浴は適度の気分転換になる。それにセッションのあいだのブレイクが三〇分と長めに取ってあるので、べつに急かされる印象もないのに、すべてのセッションがほぼ定刻どおりに進行する。欠席者がまず居なかったということも含めて、いかにも北欧ならではのお手並みであり勤勉さでもある。

また分科会が多いとややもすれば選択に苦しむものだが、この点も親切な運営だった。事前に提出を求められていたA4一枚のアブストラクトのうち、査読を経て参加が確定した発表者全員のものが、一枚広告よろしく写真複写ですべてABC順に一冊の綴じ込みに収めてある。経費節約、また参照の容易さの両面からも、このやり方は見習うに値する。

*

初日の講演1はインディアンナ大学の Claus Clüber。言語と映像学会でもボスの一角を占めつつあるかれは、非言語テクストの言語テクストによる表象に関する概論を試みるが、イェイツ、リルケ、ジョルジュ・ペレックなど英独仏のみならずポルトガル語やデンマーク語まで引用するいかにも比較文学者臭い派手な立ち回りのわりに、問題設定そのものが表面的で納得できない。たしかにアイコンの研究やエクフラシスといった文藝学的アプローチは言語の図像化の研究に自己限定するがゆえに、非言語的記号体系（例えば建築詩、非具象の絵画や彫刻）を排除する結果となってい

る点への疑義は分かる。だが両者を包含するインター・アートのインター・テクステュアリティーの提案は別種の覇権主義となり兼ねまい。むしろかれの本領は絵画詩Bildgedichteの形式主義的な読解にこそあるようで、そうした個別作品例と学問領域の特定とのあいだの相互決定・非決定のあわいを探索することのほうが、不必要な硬直化を回避するには大切な姿勢なのでは？また応答者の Tamar Yacobi（テル・アヴィヴ）のやや不明瞭な英語ながら細部にわたる批判から受けた示唆だが、たとえばユダヤ教やイスラームの伝統にある非言語的な象徴体系といった水脈にも測鉛を降ろさなくては、非言語的映像の研究は栄養失調で貧血気味になるようだ。

つづくセッション2-bはエクフラシスの再検討。ルドンの絵画言語研究で五〇年代に先鞭をつけたSven Sandströmの名前が見えるのでいささか期待して拝聴してみたところ、それが人工物であれ自然物であれ、およそ視覚映像一般を言語ないし意味の世界に移すことの不可能性を原理論として強調するおそろしく突き詰めた議論。映像のうえにさまざまな言語の解読ネットワークを被せて読解することは可能だが、あらかじめ決定された読解コードの翻訳としての映像でないかぎり、両者の関係が閉域をなすわけでないという意味で、たしかに映像は言語へと回収され尽くすことはない。だがそれだけのことで、サンドストロームのように映像が同時複数的なネットワークによって星座式constellationに意味を構成するのに対して言語の線状性は対面confrontationとして意味を構成する、という議論も無理ではないにせよ、対面関係の届かないところに定義として「映像」を退避させてしまっては、映像を棚上げして聖域化しかねない。後に私信で大先生にもちょっとけちをつけた当方のルドン研究を送るついでに、たとえばジェイムズ・ギブスンの視覚論などへのご見解は、と質問を呈してみたが、残念ながらいまのところその点に関するご返事はいただいていない。すっかり貫録がついた白髪も美しい老教授が、既製の美学でも心理学でも文藝学でもない視覚映像一般の図像学原論を目指しておられるのには共感するのだが。

このセッションで感心したのはMario Klalerというまだ若いインスブルックの「アメリカ研究Amerikanistik」の人。藝術作品の文学的言説による記述たるエクフラシスはまさに置換される媒体の異質性ゆえにむしろ詩的言語の特性の自己確認のための特権的なトポスたりえ、それを歴史的に分析することで、テクストそのものの観念や表象それじたいの考え方がいかに変遷したかを跡づけることが可能なはずだ、とする問題設定を、中世の写本から近代にいたるまでの専門的な知識に裏打ちして展開した。例証として中世の思弁的な頭脳解剖学と中世ドイツ叙事詩の構成との類比を、「記憶の宮殿」の実践例として解明し、それを現代のウィンドウズ式コンピューターと重ね合わせる藝当も見事だった。

午後3-dはレトリックと建築。オクラホマのノーマン大学からきたカウボーイのようなJim Yochは、オタワの言語と映像学会でも会った人だが、骨の髄まで完全な美術史家で、イザベル・デステの詩歌やそれにつける挿絵の注文を丹念に洗って、その文化的ラビランスのうちに投影される彼女の内面を浮かび上がらせるという意図は魅力的ながら、報告があまりに細部に淫していて、それがゴンザガの文化的権力とどう結託するのかは不明確。ヴィーン大学のFriedrich Pollerobはいかにもヴィー

ンの人という雰囲気濃厚な複雑そうな人。これもJohanna Bernhard Fischer von Erlach の建築やペイジェントの企画を巡って建築のレトリックを洗う豊かな報告だが、スライドの不調と(アブストラクトの英語にもドイツ語綴り散見の)不明瞭な発音で、時間超過のわりにはメッセージが不分明。相変わらず愉快だったのは、司会のオタワ大学Albert W. Halsall の発表。ゲルンジー島にヴィクトル・ユゴーが作らせたオートヴィルの家の室内装飾を分析し、大文豪の自我むきだしの誇大妄想ぶりを見事に摘出。屋上のガラス貼りの書斎など夏は暑くてたまらなかったはずだ、といった現場を踏んだ観察や、何を幾らで購入したといった資料の博捜を、当惑した訪問者たちのコメントに見事に結び付け、会場の爆笑を誘った。台所のチムニーに安置された母子像はもちろん無神論者ユゴーの場合聖母子であるはずはなく、まるで広東あたりの観音菩薩と混淆した隠れ天守教の像をシノワズリーとして持ち込んだようにも見えたので、その来歴を質問してみたが、それは思いつかなかった、再調査してみたいとの返事後日談だが、かれのこの論文を今年日本を巡回した『ヴィクトル・ユーゴーの世界展』[日本側監修者は稲垣直樹先生]の目録に翻訳する許可を取り付けながら、その後のなりゆきから軽率にも諦めたのは、今にしてみると大失敗だった[一九九六年八月追記]。

4-cはジェンダーとインター・アートとかで、怖いものみたさに参観。ストックホルムのTina Rosenberg はフィンランドの人だが、Elfriede Jelinek の劇『病あるいは現代の婦人』をヨーロッパの東欧の自己破壊的な自己省察(ヴィトゲンシュタイン、ムジル、カール・クラウス)とスリラーの伝統に結び付けて語る、というより自分のセラピーをその場でイェリネックに託して露呈させるいささか背筋の寒くなる信条告白。ルンドのChiristina Sjöblad はスピンクスのテーマを世紀末に美術と文学の混淆として追うという定石の復習のみ。マイアミのJonathan Strauss はバーネット・ニューマンなどのアメリカ・ミニマリスム絵画の分析で、フーコー、リオタール、ロザリンド・クラウスなどおなじみの名前が登場する分析はやや月並みだが緊張感はあり、こういう場合に作品をスライドで見ると、自分でもおもわぬ発想が広がる。アグネス・マーチンの作品のグリッドのことなどが出て来たので、そこにクラウスの分析とは違って説話的な残滓が見えるのは、これがアカデミーの絵画で拡大用の下絵に描くグリッドを脱構築する発想がそもそもあったのではないのか、また距離点の発見・発明にかかわる透視図法の無意識的記憶はどうなのか、といった思い付きの暴論を、これまたこのあたりには詳しいひねくれもの美学者Jeremy Gilbert-Rolfe などともいっしょに散会後までカフェでしばし談じ込んだが、詳細はもう思い出せない。

夕方からルンド大学が誇るスケッチ美術館でカクテル。一九五九年創建で、ピカソの『ゲルニカ』をまんまと購入し損なったという冗談が自慢。学生たちがカクテルを配ってまわるが、いささか内気すぎてなかなか目的を達しないのも、見ていてかえって微笑ましい。館長 Jan Torsten Ahlstrand は少々癖のある人だが、なぜか馬があって長時間雑談を交わす。またかれから紹介されて、サンドストローム先生ともしばしルドン談義の栄誉。

十六日火曜日

全体講演5は、新歴史主義の騎手Stephan

Greenblatt。題して「壁を通る血」。アメリカ人、とくに西海岸の学者は世界中どこへいっても自分の論法が通用すると思っているから、困る、とは後日雑談していてご本人を前に思わず言ってしまったことだが、スウェーデンの人たちには、そんなナチュラル・スピードの冗談もみんな分かるらしく、あらためて日本の英語環境がいかに甘やかされているか悟らされる。ただ単に当方の聞き取り能力がなさ過ぎるのかもしれないが。主要な論旨は明快でしかも刺激的。ヨース・ファン・ヘントの祭壇画で「これは我が体なり、これを取りて食せ」といって差し出される聖体は画面に描かれた寄進者が実際に受け取るという設定になっていて、ここには説話論的には画面に穴があいていることになる。それは永遠の真実を定着したはずの普遍的な宗教画から現実の個別的な歴史的時間が流出する穴でもある。またウッチェロの『聖餅の奇跡』では、聖餅から溢れる血は画面のなかの扉を越えて流出することで、外の民衆たちには見えないはずの室内での犯罪を可視の情景として描く口実を与えている。前者ではキリスト教世界でもっとも聖なる秘跡の秘跡たる所以が絵画上の表象の破綻によって起動されていたのにたいし、後者では統一的な画面処理を越境する血の通路によって、もっとも忌むべき存在たるユダヤ人の冒涜の罪が露出される。ここまでくれば浅田彰の『構造と力』の知識さえあれば、グリーンブラットのからくりを見破るのは容易だろう。絵画表象のうえの裂け目とイデオロギー上の飛躍点と物質的なタブーの熱力学のカタストロフィー・ポイントとが三者重なって、クラインの壺の入り口に、奇跡の開口部を不気味に開いているわけだ。

ついで6-aはフィルムと絵画芸術を扱うセッションできわめて充実。圀府寺司がヴァン・ゴッホ神話の映画化における神話化と脱神話化の様相を、ピン・ポイントのヴィデオ資料を豊富な例証としながら手堅く分析。密度も高く実に明晰。これはもはやかれの十八番だから、早く一書の成ることをのみ願って賛言は慎もう。ストックホルムのTrond Lundemoは長身・金髪に小麦色の肌という北欧人の見本みたいな好青年。セザンヌの映画化をセザンヌの手法で分析しようというリオタールばりの力技を見事な英語で演ずる。取り上げたのはJean-Marie StraubとDanièle Huillet『セザンヌ』(1989)。記憶の重層としての歴史、断片の集積としての視覚、意味を結ぶ以前の無垢な映像、断層と褶曲、マグマの噴出と冷却といった地質学への関心など、セザンヌ美学の核心を追体験することで発掘し蘇生させようとするこの映画の、通常のドキュメントものの常識を覆す試みを、さらに同様の趣向で論文として分析しようという、三重の方法論的憧着を戦略的に実践するルンデモのテクストは、いささかドゥルーズ的でなお細部に強引な重ね合わせがみえるが（それじたい取り上げた映画の手法だが）意欲的な試みとして、その創造的な意欲を評価したい。

このセッションの司会は台湾のJoyce Chi-Hui Liu。明晰な語り口。コクトーの『オルフェーの遺言』とグリーナウェイ『プロスペロの本』を例にとって言語テクストの映画映像への置換を分析し、そこにエクフラシスを裏切る映像の揺曳とそれを許す視覚独自の文法を探ろうとする。言葉の死によってはじめて映像が復活するというコクトーの『不死鳥学』、また言葉を無化し抹殺しようとするグリーナウェイの過剰なる映像の群れと際限ない劇中劇のmise en abyme。いささか知識の披瀝が過剰な

のは話題の選択ゆえかもしれないが、同時にヴィデオ併用の発表では、運動する画面の迫力と自己主張の強さのあまり、研究発表の言説が霞んでしまう。これでは頭脳に焼き付けられるのは強烈な視覚印象ばかりで分析のメッセージはその場で蒸発してしまう、という印象も抱いたのは、映画恐怖症ゆえの個人的偏見だろうか。また作品という〈象徴的贈与〉に寄生する権利と義務が自分にあると信ずる、学者という人種の自己限定への無自覚さが、彼女の場合いささか気になった。

午後7-bは「インターアートの諸相」を覗く。司会のコペンハーゲンはJorgen I. Jensen、容貌魁偉で頭髪の不自由さが威厳を与える感じの好々爺。その時代時代にいかなる分野の芸術が支配的になるかはその時代の意識とはずれる場合がある。映画の世紀が終わってはじめて映画研究がアカデミーの日程表にあがったのを見よ。こうした時代の無意識をデンマークのロマン主義黄金期と世紀末芸術における宗教意識に焦点をあてて検証しようという目論みだが、主張といささか学生相手のようなスライドの説明とに齟齬のあるような感じが否めない。つづくはJeremy Gilbert-Rolfe。美と崇高という概念の今日的見直しだが、抽象的概念ばかりの美学作文。前提とすべき知識への配慮に欠け、問題の輪郭もはっきりしないまま、一人よがりの問題設定を一方的に棒読みされてはたまらない。時差ぼけも加わりほとんどついて行けず。ロンギノスやカントの議論をいきなりバーネット・ニューマンの視点から再検討するのは、リオタールを招いたりするパサデナのアート・センターでは常識なのかもしれないが、「欲求不満を起こさせることに、美と崇高とに分節されない視覚的なるものの可能性を示唆する」という話題を分節言語でやられては聴衆の欲求不満は溜まるばかり。理解されないことにひねくれた快感を見いだしているらしいこの先生に文句を言ってもかえって思う壺だが、昨日の質問が切れ味抜群だっただけに残念。

口直しはインディアナのStephanie Moore。カテドラルという主題をめぐってモネ、ユイスマンスからドビッシーと経巡る美的観照。崇高の不気味な領域には立ち入らず、ひたすら制度として許された美の限界に沿って上品な甘口で語ってみせて、いかにも北米でのフランス的教養というのを見せつけられる思いがする。まだうら若い女性ながら、演技のほうは場数を踏んでいる風情で、立ち居振る舞いにも落ち度というものがない。とりわけ楽譜の分析に光る印象を得たが、残念ながらその洗練された細部は愚鈍生には馬耳東風。

8-b「言語＝映像のテクニック」は、学会発表というよりは実践報告。高名な文芸批評家とはまったく無関係のWolfgang Kaiserがハンブルグで自分の出版事業の宣伝。つづいてMichael Websterが猫を偏愛し、aestheticsならぬanaesthetics論による文明批評を展開したE.E. Cummingsの素描をとりこんだ言葉遊びの愉快な紹介とその詩作品の暗号読解の試み。しんがりのJerusa Pires Ferreiraはサン・パウロの人。数少ないラテン系の参加者だが、Arnaldo Antunesの『名前』というヴィデオ作品での名付けることの強迫と不安を、ポルトガル語なまり丸だしだが淀みない言葉を紡いで伝達する話藝の才能には感嘆。

夜の部は、アール・デコを彷彿とさせる特異な外装ながら、内部はだいぶ草臥れた市立映画館で、ベルイマンの『野いちご』(1957)。世界中から大学の先生を集めて、人生晩年の元大学教師の青春の回顧と栄光の幻影とを見

せるという趣向が悪趣味かどうかは問うまいが、名誉教授号授与の舞台はほかならぬルンドで、式典のロケ会場は大学本部の例の白壁古典建築なのに改めて気づかされる。映画評論のJan Ollsonが、原作の下地をつくったViking Eggelingの The Diagonal Symphony (1924)とともにベルイマン自身による撮影風景の映像を並写し、すでに病の身で最初はイーサク・ホルイ役の出演を拒んでいたヴィクトル・シェーストームが、撮り直しに疲れて持ち場を放棄しかねぬ状態になったあとで偶然のように取れてしまった笑顔のアップなどの逸話を巧みに紹介して喝采を受ける。

十七日水曜日

本日はKrapperup城への遠足。南スウェーデン・スカーニア地方の西北端に位置して、現在の母屋は一五七〇年ごろの建築。周囲の庭園を含めて財団組織とし、かつての馬屋が美術館・展覧会場、もうひとつ巨大なアーチをなす木組み天井も見事な納屋が音楽ホール、講演会場として利用されている。ここを会場に午前中のキイ・ノート9はアムステルダムの比較文学者John Neubauer。あらかじめ存在した物語に曲まわしがつけられたホフマンの物語などの場合を例に取って、そうした器楽曲の（再）説話化narrativizationを学問的課題として設定する説。formalisticな分析が主流となった音楽学において軽視されてきた説話的要素は、実際には標題音楽の主旋律や一般の享受体験さらには民衆的な著述のなかに生き残ってきたが、formalismが時代遅れになった今日、説話要素を再度文脈に取り込むことは許容されかつ必須であり、それは解釈学的で個別的な性格を帯びるだろうが、また同時に最近のPhilipp Glass、Robert Wilson、Louis Andriessenらの「ポスト・モダン」なオペラで説話の否認が進行している、という事態も考慮されねばなるまい、という。一見明確な目標設定だがnarrativeの定義が不明確、具体的に何をさしているのか曖昧なもって回った切れ味の悪い英語、門外漢の知らない研究者の論争へ深入りした学説史の総論的復習ゆえ、かえって提案の射程がぼけてしまい、聴いていてやや困惑する。

これに真っ向から批判を加えたのがグラーツのWalter Bernhart。これは明快にして説得力あり、できるものなら外国語としての英語を繰るには見習いたい出来栄え。まず音楽の構成要素をencodingして統辞化する操作はそのまま音楽を文学のサブテクストへと還元することになる危険を秘めており、プロット分析をひたすら優先するような議論はいわば当時の楽曲のなかからサブリミナルな要素を実体化する逸脱を犯す危険がある。次に文学のnarratologyのアプローチと音楽の記号学とのあいだで解釈学の占めるべき位置が不明確である。また音楽的経験といったときにその意味は作曲家に属するのか、聴衆において生ずるものなのか、それともその共生関係のなかで醸成されるものとして把握すべきなのか焦点が定まっていない。さらに器楽曲の場合楽器という器具をnarrativizationの対象とすることは、よくても比喩的な意味しかもちえないだろう。emplotmentとencodingの区別を曖昧にするようなやり方はかえってterminologyの混乱を招く。結論としてむしろこの両者の相性と距離とによって構成される場のMusikalische Denkenこそを問題とすべきだろう、といったあたりが、門外漢にも分かったような気がした骨子だろうか。

つづくHonnorary Lecture特別講演はインディ

アナ大学で音楽、オペラの比較文学の礎を築いたUlrich Weisstein名誉教授。何を題材にしてもよいのだが、今日はいちばん誰にでも親しみのあるところで、とモーツァルトの『魔笛』を例にとり、いかにオペラを「聴く」ではなくて「読む」かの実践的方法論。作曲家と戯曲家との葛藤のなかに創作の秘密を解くうえでリブレットに残されたケバだちや不整合をいかに読むかという文献学的操作が鍵を握る。とりわけ、『魔笛』はジングシュピールと大オペラとの妥協の産物であり、メルヒェン、魔法がらみの笑劇、バロックの機械仕掛けのコメディー、それにフリーメイソンがらみの人類学的イニシエイションの意図的パロディーといった多様な要素のうえに、初演時のシカネーダとモーツァルトの関係からする突発事故的な要素までが加算された複雑な弁証法を内包していて、いまさら言うまでもなく、底無しの作品だ。ドイツ語のアクセントがかえって格調を与える、無駄なく高密度でしかも明快な文章に、具体的で適確な例を、もちろん全部暗唱されている詩句から巧みに、しかし気取らず引用し、過度の理論先行は慎みながら、専門家もうならせ、一介のファン風情をも満喫させるお手並みは、さすがに特別講演の名に相応しい（細部については直接かれの著作に当たられたい）。海岸の保養地のホテルの大食堂借り切りの昼食のとき、たまたま同じテーブルになったので、素人の耳学問にすぎないが、ベルイマンの映画版における春の到来の演出のことやら、タミーノの位置づけについて臆面もなく質問してみたが、もうオペラとなれば語るのが楽しくて仕方ないというように、嫌な顔ひとつされずに、惜しげもなく対応される。

再び午前の会場に戻り、午後のキイ講演10、マインツ大学でパーフォーマンス一般の理論化を進めていることで最近注目されているErika Fischer-Lichteが自分の立場を総括。すらりとした長身をスラックスに包み、短髪のきりりとした居住まいはボーイッシュといってよい。ちょっと癖はあるが分かりやすい英語で期待していたのだが、途中から猛烈に反論したくなってきた。今日の欧米文化においては諸藝術のみならず生活のなかの立ち居振る舞いにいたるまでが、すべてperformance行為へと収斂される状況になっている、という現状認識を出発点に、この視点のなかに非欧米文化まで包含して論じようとの野心なのだが、その構想そのものがあまりにドイツ式学問特有の全体主義的発想なのだ。

質疑応答で挙手したが司会から指名されなかったので、以下は翌日口頭でおしゃべりついでに意見したにとどまるが、その内容をここに簡略に再演しておきたい。「わざと下手くそなperformanceを披露して恐縮だが、ここで東洋の標本を西欧の植民地主義的視線の興味を引くように演じてみることもお許しねがえるだろう。しょせん模倣する猿がミーメーシス美学を学んだあわれむべき成果なのだから、東洋人たる当方にはその資格があるはずだ。文化的performanceというMilton Singerの用語を利用なさったが、それが公的空間における自発的で直接的なcommunication行動だなどと楽天的に定義されるのは定義として問題がある。非媒介性は幻想にすぎず、その幻想こそ今日の欧米の『公共空間』なる哲学用語が与える錯誤に過ぎない。それを許すような環境が周囲にひとつの社会的信仰として根付き、それが無意識化されているからこそ、performanceの直接性などという錯覚が保証される。『公共』とか『直接』といった西欧近代社会でしか有

効でない概念の無反省な適用を疑問に付すことがシンガーの意図ではなかったか。またperformanceのなかでも日常的なものは藝術と区別して除外するとおっしゃるが、これでは自分の学問領域を確定するための恣意的な操作になってしまって、文化全般をperformanceとして包括したシンガーの意図を裏切る結果となる。むしろ貴方の定義にぴったりのperformanceを演じているのは仕事中の人類学者anthropologist at workではないか。なぜなら演劇的で特権的で栄えあるdistinguised代表として、非日常の文脈のなかで他者の視線に晒されてパーフォーマンスをするのは、今日では非欧米世界をフィールドとしてそこで学者を演ずる人類学者なのだから。ここで鑑賞者と演技者の立場が完全に逆転するが、そのような視線の相補性、互換性や認識論的枠組みの相対性(これこそinter-artだ)への意識を認めず、あいかわらず認識主体たる学者の側の絶対的優位を前提とし、performanceという枠組みで非欧米藝術をも含む藝術的行為を統括しようとする支配意思こそ、西欧の尺度で世界を切り取ろうとする学者的構えが無意識の裡で西欧の優位と結託した、困った発想法ではないか」云々。応答者として過度に失礼にはならぬよう配慮しながらも批判的で、パーフォーマンスを担ぐために演劇を悪玉にする論法の甘さや、恣意的に見世物として提供された政治的なパーフォーマンスに配慮の足りない点などを指摘したストックホルムのLena Hammergrenとも翌日午後雑談できて、フィッシャー=リヒテ批判で演劇論をぶつうちに意気投合してしまう。

ホノルルの快活で愉快なJoseph Stantonのスライド付きの詩の朗読をもって午後のプログラムは終了したが、先程までの好天がいつしか雨交じりに崩れ、あまりの冷え込みに皆で体操までして会場を後にした。帰路の途中のバスでふと横をみるとグリーンブラット夫妻が手持ち無沙汰にしているので、声をかけてみる。ところが当方から質問をする暇もあればこそ、こちらを日本人と見るや、逆にこの好奇心の塊から質問攻めにあってしまい、三年前のたった一度のミルトン・シンガーとの出会いを思い出す。大江やばななは英訳ですべて読んでいるらしいこの博識学者は、曰くこのあいだの日本のシェイクスピア学会ではすごい日本人学者がいて驚いた(五名の固有名詞が正確に口にされ、当方も存じ上げるかたばかりとて、ひとりひとりの品定めまでして興じてしまったが、これは省略させていただく)。いわくミヨシ・マサオは日本ではどう評価されているか、曰くハルキ・ムラカミというのに会ったがあれはどうだ、曰く日本文学の世界性についてどう思う、曰くテツオ・ナジタの歴史研究は良いと思うが君の意見は、曰くオウム真理教の一件はあれはどういうことだ、などなど。ミヨシほど礼儀正しい日本語をしゃべるひとはいない、といわれているとか、ハルキは北米ではpolitically correctに振る舞うのにうんざりしたようだ、リービ英雄にいわすとカリフォルニアには四季がないから日本文学なんか教えようがない、などと当方が問題紛糾を意図した受け答えをし、場当たりの説明をでっちあげるのに、いちいち適確に対応して下さる。オウムの件は我ながらうまい理屈を思いついた記憶があるが、中身はもう覚えていない。そのうち話はなぜかラシュディー事件で暗殺されたと推定される五十嵐一のことに及び、たまたま持参の英語論文を進呈したところ、翌朝一番には肩を叩かれ「僕と同じ発想だね」。思えば五十嵐は自らを位相幾何学

でいう「特異点」と任じイスラームと西欧とのあいだの「壁の穴」たらんとし、その自覚にたってハムレットを葬るホレーショの台詞を引いた学者だった。とまれ初対面の未知数相手に即興でこれだけの対応をする蓄積と吸収力と知性とがあってはじめてグリーンブラットの今日の地位と名声もあるものと納得した次第。

十八日木曜日

キイ・ノート11はハーヴァードのNorman Bryson。昨日姿を見せなかったのはこの準備のためだろうか。ミシマとホソエの*Ordeal by Roses*つまり『薔薇刑』を取り上げ虚構fictionと写真の絡まりを論ずる常ながらスリリングな読解。改訂版は三島の二十五周忌でもある今年日本のどこかの文藝誌で特集もあろうから、そちらに掲載してもらえるのを楽しみにしたいが、とご本人にも申し上げたので、ここで要約することは差し控えたい。材料さえ集めれば最高の料理人のお手前に文句はないのだが、いくつか材料のほうに問題があるようで、質問の手をあげたものの、またしても司会から無視されたので、発表後のコヒーブレイクで談じ込む。まず三島がサロメと洗者ヨハネの演出を何度か手掛け、とりわけ死後上演となることを承知のうえで最期の演出をした事実をどうやら日本のインフォーマントはブライソンに話すのを忘れたらしい。聖セバスティアーヌスにも増してこちらは「切られた首」のモチーフなのだからどうしたって確信犯である。外国の研究者が日本物に手を出すのを見てたて突くのではいかにもはしたないので、むしろこの要素も取り込まれればさらに充実しますよ、という意味でのご注進だが、かれはその後すばやく本件での世界一の専門家井村君江先生宅を訪問して必要な資料を補強したのだから、たいしたものだ。それにしても井村さんのご生活ぶりにはさすがのかれもド肝を抜かれたらしいが。

それからこれは剣術を齧っているものとして、と断ってだが、ボディー・ビルで膨らませた肉体に刀の写真は知ってるひとにはすぐわかるインチキですよと、このあたりいささか幻想を持っているらしいブライソンに念を押す。最後にこれは思い付きだが、と断って、細江の写真に執拗に登場する時計について、学習院で天皇から恩賜の銀時計を三島が貰ったことと無関係ではあるまいし、この逸話に触れることで、意味の重層と役割僭称、それに時間軸の遡及というあなたのおっしゃる三島の美学とも対応がつくのでは。サロメの件に戻るなら、だから市ケ谷が最後の舞台ではなくて、ちゃんと死後の舞台まで用意してあって、こちらが象徴的な埋葬行為だったのではないかしらん、いずれにせよ自己の身体を切り刻んで欧米という他者の視線に晒すという行為が三島のノーベル文学賞への執着の背景にあった以上、かれの純粋な行為とみえる自刃もその劇場仕立てに過ぎず、どちらが現実かどちらが文学か決定不可能な裏表というあなたの設問とも同調するはずだ、それこそがordealなのだから、などと無責任なおしゃべり。おしまいに付け加えてモーリス・パンゲの*La Mort volontaire au Japon*だけは読んでおいてください、と注文ひとつ。こういう土着人のいらぬお節介や口だしに嫌な顔もせずにすなおに反省してみせるところが「無頼村」の偉いところ。

つづく分科会12-bは言語と映像。まずPhilippe Déanが絵画を言語学的なサインとして位置付けるディドロのヒエログリフ論を分析し、こ

の見解が絵画は概念の模倣を事とするという百科全書での「藝術」の定義と癒着し、そうしたヒエログリフにおける視覚と音素との対応を強調するディドロのこじつけぶりが、言語の起源に説話構築の文脈依存性（つまり口語性）を見いだしたコンディヤックやウォーバートンの議論に比べて「論理中心主義的」であり、そうした神話的なオリエントでのヒエログリフの起源に関する理論がディドロの絵画批評を背後から支えている問題系の機軸をなす、というのだが、いささかディドロのこじつけの理論的作文をまじめに取りすぎたため、かえってディドロ策略にはまってその矛盾ゆえの批評の豊饒さを取り逃がしているし、ヒエログリフ論を美術批評の基準に据える見解も論理が飛躍しているな、などと感じていると、ブライソンがまさにその主旨の質問をもうすこし専門的な言葉で発した。当方にはその用意がない。深く反省。

残るはオスロの Arne Melberg がリルケの『オルフォイスのソネット』。かつて何編か暗記していたはずの話題なのだが、形象的なものと言葉の息吹との係わりを論ずるという建前で《In Wahrheit singen, ist ein ander Hauch/ Ein Hauch um nichts. Ein Wehe im Gott. Ein Wind》といった実際の詩句の読みは堪能したものの、両者がどう係わるのか残念ならが分からず仕舞い。最後にストックホルムの Roland Lysell が Almquvist を論ずるが、多量の原文引用を前にして外国人聴衆は降参。学会など所詮自分の無学を悟る場にすぎまいから、仏・独・瑞語という作業言語以外の韻律に接したことで多としたい。

午後の 13-d は視覚藝術における説話構造。司会を拝命しながら、昼食延長で遅刻した稲賀が前座。十九世紀フランス絵画における戦争画の衰退と戦争の歴史叙述における説話構造の解体との関連をめぐりゾラの小説『大崩壊』とその周辺に焦点を当てた問題提起。絵画作品において忌避された説話構造があろうことかそうした忌避に走った画家たちの伝記の説話構造に取り込まれた、という皮肉がはたして聴衆に理解されたか疑問。つづいて地元ルンド大学院生で元気だが話がやや飛躍するきらいのある Pontus Kyander がエジプトの象形文字からはじめてバイユーのタペストリー、さらにはクリンガーの『手袋』エルジェの『タンタン』マックス・エルンストの『百頭女』エドワード・ゴーレイに至る説話構造と戦略、とりわけその枠に対する画家の意識と画面の自己主張を分析。最後はデンマークの赤毛の青年 Jan Bäcklund が「視覚芸術におけるテクスチュアリティー」と題してプロト・モダンな作品概念の解体 desoeuvrement（『知られざる傑作』の完遂不可能性）とその文脈依存性（ハンス・ハーケにおける index）を哲学的に論じた。晩期モダンにあっては、崇高への野心は視覚的な aura へ、そして textual な現実性は semantization へと分極するという仮説を手書きの O.H.P. で示すのだが、具体例が不明で把握困難。そもそも narrative の定義からして十九世紀 Academie、Genette、Nelson Goodman さらに Joseph Kosuth と演者三人の準拠する枠が違うため、ご覧のとおりこんな要約では意味不明、何とも取りまとめがつかない。戦争画の崩壊が表象可能性への疑念という点で一方では bande dessinée という時間的契機への解体へと展開し、他方ではそれと裏腹に個別の完結した作品という概念の終焉と決定不可能な文脈依存性への解放系を開いたと見れば、三人の問題圏に通底するものも明らかにはなるのだが、結局話題が拡散しすぎているうえに、司

会はしどろもどろ、聴衆からも質問ひとつ出ず、いささか散漫な印象で拍子抜けしたまま散会してしまう。

反対にその充実ぶりが羨ましいほどだったのが14-a「オペラ・哲学的美学的視点」。コペンハーゲンのNils Holger Pertersenがモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』とキルケゴール哲学との関連を語った発表は残念ながら聞き逃したが、ウプサラのTorsten Peterssonが『マクベス』『リゴレット』『ラ・トラヴィアータ』などヴェルデイとピアーヴェの共作のあまりにも有名な作品群にある神の人間の行為への干渉をまじめなメッセージとして解読する試みは、リブレットの解読と作曲上の工夫を見事に分析し、繊細な発表者の感性と確かな鑑識眼を見せつけたばかりか、音楽通ぞろいの聴衆の敏感な反応と適確な質問にも感心させられる。お目当てはWalter Bernhart。生誕百周年を迎えるPaul Hindemithが *Cardillac, the Criminal Artist* (1926)を一九五二年に合奏つきオペラ仕立てから音楽ドラマへと改作ないし改悪した事例を取り上げ、犯罪者としての芸術家のプロトタイプを示しながら道徳的な判断を棚上げにした前作のほうが、殺人犯の金細工師の罪と放免とを区別した後者よりもオペラとしては成功している点に、オペラのリブレットと戯曲との違いを検証する。さらに音楽とテクストとの相互独立性の高い前作のほうが、両者に緊密な関係を練り上げた後者より高く評価されてしまう事実に、二〇世紀におけるオペラというジャンルそのものの困難までも読み込む企て。拝聴していて見事なまでの説得力があったのは、ピアニストとしてもいっぱしのベルンハルトの腕に幻惑されたためだろうか。

晩は世紀末アール・ヌーヴォーの風格あるグラン・ホテルの大宴会場貸し切りで、はやバンケット。主催者側が入念に工夫した席配置で十人一組ほどのグループが都合十五。それぞれの席にIntermedialityとかUt pictura poesisとかGesamtkustwerkとかと名前がつけられていて、当方はJoseph StantonやダブリンのDavid Scottなどと共にpictorealism。スコットは来年トリニティー・カレッジで開催予定のWord & Imageへの参加者探しに余念がない。Ulla-Britta夫人の夫君Erland Lagerroth名誉教授がホスト。両側のおばさまたちは発表者ではなかったが、絵本の研究者というストックホルムの先生は途中からフランス語に切り替えてくださり、いいかげん英語にうんざりしていた当方としては大助かり。余興には「野蛮」なヴァイキングが昔の楽器を使って藝をする趣向のけっこう卑猥な笑話もあって、思わぬ一面を見せつけられる。ベルンハルトは即興でショスタコーヴィッチ。最後は例によってお偉方の演説だが、毎度のようにこれだけは真似できぬと思う。

十九日金曜日

15キイは赤ら顔で太っちょの映画学者Noël Carroll。藝術と情動という題名で、伝統的な哲学用語はすべて抜きにしたおしゃべりだが、かれの言うemotionの意味が最後までさっぱり把握できず。終盤になってようやく例えば『ロッキー』をみて闘争心が沸いたり『怒りのランボー』をみて乱暴な気持ちになって怒りが伝染したりする類いの実に「動物的」な情動と分かりゲンナリ。まだ寅さん映画をみてなぜアメリカ人も泣くのかでも分析したほうがましだろう、と思うことしきり。応答者のJean Olssonも言ったように、そもそもemotionを作品に内在するものとも観衆の個人的な反

応とも区別せず、創作も受容もいっしょくたにしてcriteriaとして論を立てることが無理ではないか。こんな乱暴な論法が北米では通用するのかしらん、と訝しがる。このあたりで緊張が切れたようで、マルティメディアとしての映画論のセッション16-cでRichard Allen、Richard Raskin、Patrik Sjöberg、Peter Harcourtらの話と画面を楽しみ、午後の総会ではうとうとし、最後のカクテルもそこそこに四時からは美術史教室主催のNorman Brysonの特別講義に行く。驚異の部屋から公共美術館への政治学をフーコーとミッシェル・ド・セルトーを種に歴史的に展望する見事な講義（早く書物として公刊してほしいものだ。それにしてもいつから「死せるセルトー」はこんなに北米でもてはやされるようになったのだろう）。ついで大学院のセミナーに闖入させていただく。話題はなんと森村泰昌論。シンディー・シャーマンと比較した昨年の大阪大学主催のセミナーでの発表以降、ずいぶん勉強したとみえて資料も充実、話術はまさに名人藝だが、またしても日本人の特権を発揮して囹府寺氏ともども、僭越にもコメント。

まずシンボリズムの誤解が意味を生産すること。つまりマネの『ナナ』の画面の屏風には鶴の足が覗くが、東洋での「長寿」が西洋では「淫売」という悪い含意に化ける。逆に森村は『オランピア』のappropriationで原作の黒猫の代わりに招き猫を据えたが、この起源が陽物信仰が外国人の手前まずいという政府のお達しで明治年間に発明された代替品だったことは井上章一の研究にもあるとおり。西洋人には読めないことを前提とした森村のイタズラだろう。そもそもManet et Manebitではないが、マネるとは日本語でimitateの〈意味〉だ。泰西名画横領の手法はもうマンネリになった、ウンザリだとおっしゃるが、これはもはや外国向けの年中行事だろう。クリストが梱包を始めたころに、百円札偽造裁判で有名な赤瀬川源平はinside outという発想の転換で、すでに宇宙の缶詰という究極の梱包作品を作っていた。コンセプトとしてはもう行き詰まりだが、それでも外国人相手にはクリストの反復強迫の真似を一生続けて、すべての泰西名作を自分の顔で梱包し横領し続けるしかない。それはビジネスと森村は割り切っているのではないか。アルパースいうところのレンブラントの「企業精神」ではないが、海外市場の批評言語に口実を与え続けることが、内外の二重価格制という文化的ダンピングを利用しつづける原動力でもあるのだから。森村批判の言説の繁殖が森村産業の発展に貢献することは敵も先刻ご承知で、黙殺と忘却にしくはない。当地に来るときの機内で偶然読んだ日経新聞に森村のインタヴューがあって、ブライソンはじめ西欧の大先生がいろいろおどろおどろしい理屈をつけてくれるのには、もうウンザリだ、自分は楽しいことをしてるだけ、とありましたよ、と一言ご忠告。

夜は主賓ともども美術史教室内々の宴会に招かれ、あの白亜の大学本部屋根裏の美術史教室図書室に蝋燭ともして、いかにも北欧という感じのインティメイトな交換を楽しむ。予期せぬ名誉。日本人学生と同様、スウェーデンの学生たちもここに至ってようやく気軽に本音を語ってくれる。談尽きぬ交歓は深夜にいたりようやく幕。午後のパネルから講演、セミナーと超人的な日程で働きづめのブライソンが最後に一言、"I'm crashing!"

（一九九六年六月）

ars 1996 4

literary magazine of tohoku university of art and design

東北芸術工科大学文藝
第4号

発行日	1996年11月1日	
企画・発行	ars編集委員会	
	田島正樹［代表］	
	谷川昌幸	
	手嶋兼輔	
	上田高弘	
	千葉一幹	
	990 山形市上桜田200番地	
	東北芸術工科大学内	
	tel . 0236-27-2000 (代)	
第4号編集実務	千葉一幹	
学生スタッフ	柏原智絵	柴崎由美子
	高橋雪枝	千田由花
	吉田朗子	穐山仁
	石澤かおり	斧田薫
デザイン／レイアウト	加藤芳彦	
印刷・製本	大風印刷	

© 1996

定価＝1,250円（本体＝1,214円）